



■フォトエッセイ■

シンガポールを訪れて

——小さな都市国家の諸相——

写真・文 土佐美菜実
Minami Tosa

マレー半島南端に位置する都市国家シンガポール。東南アジアのなかでもいち早く目覚ましい経済発展を遂げ、今や世界有数の国際金融センターとして知られている。2016年の1人あたりGDPは5万USドル以上、国内の月収中央値は4000USドルを超え、世界の大学ランキングでもシンガポール国立大学は欧米の有名校と常に肩を並べ、アジアでは首位の座を守り続けている。今回、出張で初めてシンガポールを訪れることになり、これまで本やインターネット、統計上の数値でしか知ることのなかったかの国について、実際に見聞して感じたことをこのフォトエッセイで紹介したい。

チャンギ国際空港に到着し、そこから鉄道で街の中心地へ向かった。乗車した車両のなかには中国系、マレー系、インド系の人々が各々の言語で談笑しておりシンガポールの日常風景が眼前に広がっていた。空港や駅など、公共施設における案内表示も英語、中国語、マレー語、タミル語で表記されており、多民族国家シンガポールに来たことを実感させる。

市街地に出ると、近代的な高層ビルが立ち並んでおり、都市としての整備がよく進んでいることが早速わかった。車道では2階建バスが頻繁に走っており、シンガポール初心者の筆者はこの光景からイギリス植民



高層ビルを背景に広場で野球をする人びと

地だったこの国の経験を想起した。さらに降りた駅のエスカレーターのスピードが異常に速かったことから、かつて旅行で訪れたロンドンでも地下鉄のエスカレーターが相当速かったことを思い出し、あのエスカレーターもイギリスの影響だろうか、などと30kg近いキャリアケースを引きずりながら考えてしまった。街を歩くと、近代的なビルと一緒に植民地時代の名残を残した美しい建物が時折並んでおり、シンガポールの繁栄とともにその歴史を感じることができた。

街中の歩道は十分なスペースが確保され、かつきちんと舗装されている。よそ見をしていると落ちてしまいかねない大きな穴もない。またポイ捨てに対する罰金制度については以前からよく聞いていたが、確かに見たところゴミと呼ばれるようなものはほとんど落ちていない。悪臭を感じることもなく、このあたりは「聞いていたとおり」といえる。シンガポールで最大の書店といわれる紀伊國屋書店へ向かう途中に歩いたオーチャード通りも、有名ブランドのお店が並んでおり日本の表参道のような雰囲気だ。経済指標や大学ランキングで示されるシンガポールのイメージどおりである。

さて、別の日にホーカーズと呼ばれる多種多様なローカルフードの屋台が集合している場所に連れて行ってもらった。日本でも人気のチキンライスやお粥、



手前の白い建物はかつて中央郵便局として使われていたフラートンホテル



ホーカーズの風景



地元の人や観光客で賑わう

搾りたてジュースのお店など、東南アジア地域では定番とも呼べる食欲のそそられる屋台がずらりと並ぶ。人気のあるお店では店員がせわしく、そして手際よく注文された料理を用意している。先ほどの経済発展の象徴のような高層ビルや歴史を語るコロニアル建築とはまた異なったシンガポールの光景で、東南アジアの諸地域を何度か訪問したことがある筆者にとっては少し見慣れた雰囲気であった。ところが、通常こうし



カラフルな色合いが印象的な建築



赤と黄色のランタンが通り中に飾られている



チャイナタウンにあるとある雑貨屋



シンガポール仏牙寺龍華院の内部。黄金に輝くご本尊がまぶしい



豪華な装飾品とともにまつられている

た屋台が密集した「地元の台所」ではローカルな食材や調味料、そしてその他の匂いが混在してなんともいえない空気が充満していることが多いのだが、その予感に反してここではなぜかそのような香りが漂ってこない。これがシンガポールらしさなのだろうか。一見すると東南アジアらしい風景でありながら、実際にその空間に入ってみるとシンガポールらしさが垣間見えてくる。シンガポールでは飲食店に対してそれぞれの衛生状況についてA、B、C…でランク付けがされており、それを店先で表示することが義務付けられているとのこと。こうした衛生面での管理体制が東南アジアらしい光景にシンガポールらしさを織り交ぜた独自の雰囲気構成しているように思える。

中華系の国民が人口の7割以上を占めるシンガポールにも、チャイナタウンと呼ばれる地区がある。そこはかつて中国系移民の指定居住区域とされていたエリアだったようで、中国移民と現地の文化が融合したプラナカン文化の特徴を持つカラフルな建物が並ぶ。今では中国系の伝統文化を感じながらグルメやショッピング



シンガポールのミャンマー人街。各階に小規模の店舗が並ぶ



野菜を売る商店



スタンドに並ぶビルマ語の新聞

ングを楽しむ人気の観光スポットとなっているようだ。さらにこのエリアでひととき目立つシンガポール仏牙寺龍華院の豪華さはシンガポール人の信仰の厚さと富を体現しているともいえるだろう。

旅程も終盤の頃、両替屋を探しにホテル近くの商業施設に入った。キョロキョロしながら歩きまわっていると、あることに気づく。この建物に入っている店舗の看板の多くがビルマ語で書かれているのである。どうやらここはミャンマー人たちが営むお店が軒を連ねるミャンマー人街のようだ。店舗は飲食から雑貨、旅行代理店、美容院などさまざまで、



伝統衣装ロンジーのお店



ビルマ語で書かれた看板

よく見ると行き交う人もミャンマー人と思われる顔立ちの人ばかり。大半のお店にアウン・サン・スーチー氏のカレンダーや写真が飾られており、飛び交う会話からも英語や中国語でもない耳なれない言葉が聞こえてくる。ミャンマーの伝統衣装ロンジーを売る女性に聞いてみると、すでにシンガポールに来て10年以上になるという。シンガポールの人口は560万人ほど、このうち外国人籍はおよそ160万人である。外国人労働者を多く受け入れているシンガポールにとって外国人コミュニティがあることはごく自然なことであるが、偶然にもシンガポールのこうした空間に足を踏み入れることができ嬉しかった。

今回の滞在は国土わずか約719平方kmのなかに凝縮された経済発展、植民地時代、多民族国家、外国人コミュニティなど、シンガポールを構成する諸相を経験する貴重な機会となった。

とさ みなみ / アジア経済研究所 図書館

アジア経済研究所図書館ライブラリアン
東南アジア地域を担当。